平成31年(令和元年)度 学校自己評価表(中間評価)

中長期目標 (学校ビジョン)	1. 主体的学習者の育成 2. 21世紀をリードする人材の育成	今年度の重点目標	1 次代を生き抜く学力の伸長 2 定時制教育のさらなる充実 3 業務改善の取り組み
-------------------	------------------------------------	----------	---

○評価基準 A 80%以上(概ね達成) B 60～80%(一定の成果がある) C 40～60%(さらなる努力が必要) D 40%以下(現状が改善されていない)

【全日制課程】

評価項目	具体的項目	年度当初			中間評価結果(10)月		
		現状	目標(年度末の目指す姿)	目標達成のための方策	経過・達成状況	評価	後期・次年度に向けての改善方策
基礎学力の定着 (知識・技能の習得)	基礎学力の定着 (知識・技能の習得)	・家庭学習時間1日3時間の目標は、全学年の平均で達成できているが、学年別では1、2年が到達していない。時間割編成上、個のレベルに応じた授業には限界があるが、学力層に応じた課題が用意され与えられている。 ・リメディアルはできていない。1年次において到達度テスト(スタディサプリ)が活用され始めている。	・家庭学習時間は1日3時間は確保され、学力に応じた課題と授業により、効果的な学力の定着が図られている。 ・生徒は個々のつまずきに対応した学び直しを家庭で行い、基礎学力の定着を進めている。	・家庭学習調査は年5回実施を継続する。 ・単位制の特性を活かした教育課程の研究を進め、学力層に応じた授業を展開できるようにする。 ・新入生の3科の学力を合格者テストと到達度テスト(スタディサプリ)を使用して調査し、リメディアルを1か月実施する。定期考査で成果を検証する。 ・校内のWifi環境を整え、ICTの活用を進めることで生徒の学習を管理できるようにする。	・家庭学習調査3回分の平均は1年194分、2年150分、3年213分であった。1日60分以下の生徒は2年生に多い。 ・来年度の教育課程において学校設定科目を大幅に増やし、習熟度別授業ができるようにした。 ・新入生に対して3教科のリメディアルとスタディーサプリの導入を行った。この効果はこれからの検証が必要である。 ・設置が認可され、校内のWifi設置が9月中にはできる運びとなった。	B	・習熟度別授業のための学校設定科目の申請を進め、来年度からの実施を目指す。 ・個別最適化のためのAI教材の研究を行い、到達度に応じた学習法を提示し、生徒の自発的取り組みを支援する。
	学力向上	・各教科において入試改革による思考力、判断力、表現力をみる問題の研究をすすめているが、授業評価アンケートの「授業で教え合いや課題解決の場がかなりある」は64.7%であった。 ・各教科において来年度の入試改革に対応した評価問題の研究が行われているが、教科を超えた話し合いや、成果物を共有する場は設けられていない。	・授業を通じて生徒は基礎学力が定着し、思考力、判断力、表現力が高まっており、今年度の授業評価の「授業内での課題解決の場がかなりある」の数値が80%となっている。 ・進路指導テストや定期考査において、知識・理解の評価だけでなく、思考力・判断力・表現力を評価する問作が行われている。	・全ての授業を基本的に公開とし、研究授業の際は他教科の教員も積極的な参観を行う。 ・研究授業の指導案に、思考力・判断力・表現力を高める工夫を分かりやすく標記するよう促す。 ・先進校視察の後には授業実践報告書を作成し職員研修で共有する。 ・授業アンケートは年2回の実施を継続するとともに、アンケート内容の再検討を行う。 ・各教科で思考力、判断力、表現力をみる評価問題と評価ルーブリックを公開し、ノウハウを共有する。	・英語教育と国際バカロレアなどの先進校視察の報告は、教職員研修会で適切に行なわれている。 ・思考力・判断力・表現力を鍛える問作として、定期テスト等における記述問題の割合を増やすよう掛けている。 ・グループGSuiteForEducationの導入を県にはたらきかけ今年度の導入を目指す。 ・前期に行なわれた公開授業では、同一教科の教職員中心の参観にとどまっているケースが多かった。 ・前期の授業アンケートは適切に行なわれ、評価内容を一覧表にまとめて共有した。	B	・中、長期的なICT整備を計画し、活用のための研究研修を推進する。 ・研究授業は、ICTの活用をテーマに、各教科年間2回の実施を継続する。 ・シラバスの内容に、ルーブリックを組み入れ、生徒自らが自己評価ができるようにする。 ・「学びの文化祭in倉吉」にむけて、思考力・判断力・表現力を高める指導方法の工夫やデジタルデバイスの活用方法について各教科で検討し、教科を超えた指導方法の共有を図る。また、評価問題や評価のためのルーブリックも示し評価方法についても議論を深める。
探究学習	探究活動の推進	・探究学習に関する理解は進んだが、まだ探究が深い学びとなっていない。 ・1年次のスキル学習では研究対象が校内で限定され、発表も同一学年内にとどまっていた。 ・昨年までの必読図書が廃止され、生徒の興味関心に応じて自由に本を選んで読む方式に変更されたが、朝読書では読むべき本を探しあぐねている生徒も散見される。 ・高校生フォーラムに変わり探究活動がスタートすることで、プレコンと探究活動とが効果的に結びつくよう工夫していく必要が生じている。	・探究活動が充実し、生徒の評価ルーブリックの平均値が「3」(最高点は4)を上回っている。 ・探究が校内だけでなく、全国的なコンテストへの応募が30件以上あり、海外との共同研究もおこなわれるなど、研究が外部に展開している。 ・生徒が主体的に読書を行い、図書館の貸出冊数が前年比で2倍に増加している。 ・プレゼンテーションコンテストを通じて3年生が探究のリーダーシップを発揮すると共に、2年生も探究学習で培ったノウハウを提供し、充実したプレゼンテーションが行われている。	・先進校の事例研究を進め、生徒・指導教員に分かりやすい情報提供・技術指導を行う。 ・外国の高校との共同研究を充実させるとともに、外部のコンテストの情報収集・提供し、積極的な応募を促す。 ・必要な書籍購入を進めるとともに、図書館の環境整備や書籍情報の提供など、豊かな読書環境の整備を進める。 ・生徒会は探究部と連携を取りながら、企画運営面での工夫を行う。探究活動を通して身につけたスキルを活用する場や機会を確保する。	・各教科単位で先進校視察を実施し、その成果を職員研修会で発表してもらっている。 ・探究の過程で得た知見や、探究の成果を外部コンテストに結びつけて、進んで応募しようというチームが非常に少ない。 ・図書委員を中心に、新刊の選定や「図書だより」の作成などを生徒の手で行なっているが、図書館利用者が一部生徒に限定されている。 ・学園祭のプレゼンテーションコンテストはこれまでの取組を継承し、テーマ設定や探究活動、運営面で充実した活動になっていたが、探究的な学習の時間がスタートするなど環境が変化している。	B	・先進校視察だけでなく、パナソニック教育財団やベネッセ、リクルートなどから得た情報を適時教職員に還元する。 ・外部コンテストへの応募に関しては、提示に加えてグループセッションでの情報提供を積極的に行う。 ・1階階段下の語り場の「図書館情報コーナー」を充実させる。 ・2月の探究成果発表会に向けて、プレコン・フォーラム委員を再編成し、生徒の手による運営体制を構築する。 ・来年度に向けて学園祭におけるプレコンの廃止も含めて検討していく。
	キャリア教育	キャリア教育の充実	・3年間を見通した学習に関するロードマップがなく、リメディアルが必要な生徒や発展的な学習が必要な生徒への手立てが効果的に行われておらず、そのような生徒の進路実現が十分に達成できていない。	・3年間を見通した計画的かつ効果的な学習活動を行うことで、自己の進路実現に向けた学力を身につけている。 ・大学合格者数が学校指標(超難関大学合格者5名以上、難関大学合格者20名以上、中堅大学合格者50名以上)に到達している。	・3年間を見通した学習に関するロードマップを全教科で作成する。その際に、授業、課題、スタディサプリを学力層別に効果的に設定し、進路指導テストとリンクさせた質の高い学習活動を計画する。また、課題量の調整を行い、各教科の学習バランスが適正なものとなるようにする。 ・高大接続改革についての研究を行う。 ・大学入学共通テストの研究会を実施する。	・「ロードマップ」を国教英理地歴公民の各教科で作成したので、質の高い学習に繋がるように記述内容について学校内で検討中である。 ・高大接続改革のひとつである「新入試」の来年度開始に向けて、大学入試共通テスト、英語資格・検定試験などに関する情報を収集し、学校内で対策を準備中である。 ・大学入学共通テストの校内研究会は、前期は実施していない。	C
学校行事の充実	学校行事の充実	・生徒が主体性を発揮する場が少なく、部活動のルールについてもあいまいな部分があった。 ・海外研修は、朝鮮半島情勢の影響により従来の韓国研修旅行ではなく、一昨年は沖縄、昨年は台湾に変更して実施した。また、同様の理由で韓国安養高校との交流事業も2年間中止となっている。	・部活動学校方針に則り、教職員及び生徒が創意工夫を凝らして活動し、豊かな人間性や社会性を育む中で、部活動が喜びや生きがいの場となり、生徒アンケートの結果で肯定的回答が90%を超えている。 ・さまざまな国際交流を通じて他国の文化や価値観を理解し、世界的な視野で物事を考えることができる。	・活動時間を見直し、改めて生徒の主体性を促す。教員は生徒が自発的に行動する場を提供し、充実した活動となるよう努める。 ・朝鮮半島情勢は、依然として不安定であるため、昨年に引き続き、台湾研修旅行で実施する。今後も台湾で継続の可能性が高いので、台湾での研修プログラムの研究を進める。 ・2年間中止となっている安養高校との交流事業について、今年度は、受け入れという形で各分掌が連携しながら実施する。 ・他校の探究プログラムとの系統的な位置づけの中で、セントジョセフ高校、安養高校との交流を図る。	・年度当初から、平日の部活動を19時完全下校とし、生徒会部による見回りも行った。ルールを明確にしたことで、教職員が指導しやすくなっただけでなく、生徒は限られた時間の中で計画的に取り組んでいる。また、部活動ごとに活動計画を提出する中で、週末でも活動しない日が設定され生徒の体調管理や自宅学習に有効に活用されている。 ・安養高校のホームステイ受け入れについては、連絡調整はスムーズに行えたが、参加人数及び日程調整がつかず中止となった。 ・学校祭のプレゼンテーションコンテストに探究活動の一環としてセントジョセフ高校を招き、併せて生徒間の交流を図り、親睦を深めた。	(B)	・来年度も部活動の時間は同様としたい。生徒の主体性を意識した指導を顧問が行うよう呼びかけを行っていく。 ・ホームステイについては、受け入れ人数と時期(全学年とも行事等がない)について検討が必要である。 ・2月の探究成果発表会に安養高校、セントジョセフ高校が来校予定で、交流を図りたい。
	学校の教育力の伸長	人権教育の充実	・生徒は概ね安心安全な学校生活を送っているが、一部生徒同士でからかいなどがあつた。 ・人権教育LHR委員は、教職員と話し合いを持ちながらLHRの運営をしているが、他の生徒の取り組みは受け身になりがちである。	・生徒一人一人が大切にされ、自分らしく安心安全な学校生活を送っている。 ・人権教育LHR委員が中心となり、人権教育LHRの企画・立案・運営を行うことで、活発な意見交換が行われ、人権意識が深まっている。	・授業、学校行事、部活動など全教科全領域に亘り人権教育に取り組み意識を持つ。 ・すべての生徒が自分のこととして人権について考えられるよう、探究型の人権教育LHRの企画から教職員が深く関わる。	・教職員人権教育研修会を通して差別の解消について学び、人権意識の向上を図った。 ・生徒と教職員が事前に話し合いの場を持ち、連携して人権教育LHRの企画・運営を行っている。	B
外部との連携	外部との連携	・学校・育友会ホームページや倉東だより等広報誌によって本校の教育活動についてリアルタイムな情報発信に努めたが、ホームページにおいて一部、部活動情報等の更新が不十分であった。 ・育友会には、「大人の一言」や「強歩大会での豚汁支援」など様々な取り組みを通して生徒の教育活動をサポートしていただいている。また、同窓会においても、昨年、110周年事業が開催され、基金を通して経済的な面で生徒の教育活動を支援していただいている。	・本校の教育活動に係るリアルタイムな情報発信に努め、地域・保護者・中学生等へ広く情報提供できている。 ・本校の教育方針を踏まえ、育友会や同窓会との連携をより一層充実させ、生徒を学習面・生活面でサポートするとともに会員一人一人が学び、参加・交流できるような活動が展開されている。	・本校の教育活動に係るリアルタイムな情報発信に努めるとともに、本校ホームページをより分かりやすく、魅力的なものにし、地域・保護者・中学生等へ広く情報提供していく。 ・委員のご理解とご協力を得て活発な活動を推進し、一層の活性化を図る。	・リアルタイムな情報発信に努めているが、今の校内の技術では修正できない箇所(地図が表示されない、校歌が再生できないなど)や最近の配布物コーナーなど活用がされていない箇所もある。また、部活動によって記事の更新頻度が異なる。 ・育友会、鴨水同窓会の活動については、会員の理解と協力、教職員との連携によって、今のところスムーズに会務を終えている。	B	・ホームページの修正や大幅なレイアウトの変更など、校内で対応できない場合の外部の委託先があること良い。 ・最近の配布物、部活動記事の更新を再度学年と各顧問に依頼する。 ・会員と教職員の連携を図りながら充実した活動にする。

【定時制課程】

評価項目	具体的項目	年度当初			中間評価結果(10)月		
		現状	目標(年度末の目指す姿)	目標達成のための方策	経過・達成状況	評価	次年度に向けての改善方策
定時制教育のさらなる充実	積極的な生徒指導による授業規律の確立と主体性の育成	・授業規律を守り、生徒会活動においてもその重要性を意識し活動している。講演等の内容を肯定的にとらえ、高い進路目標を目指して学校生活と就労を両立させている。 ・2年次生関西研修で夜間中学生との交流を通して学ぶことの意義について考えとともに、企業見学等を通して生徒の進路意識が高まっている。 ・各行事を生徒会執行部が中心となって運営している。 ・日頃から生徒理解に努め、家庭訪問・職場訪問・個別面談・保護者懇談などを実施し迅速で適切な生徒指導に努めている。	・規律ある学習態度が維持されており、学習の意義や目的を多くの生徒が理解し、その結果、一人ひとりの希望進路の実現につながっている。 ・生徒の授業に対する理解度や満足度が高く、学習意欲や学力が向上している。 ・生徒が主体となって様々な活動や行事を行うことにより、社会で必要とされる力を身につけることができる。	・授業規律の重要性を認識させるとともに、常に個々に応じた授業改善に努め、生徒の理解度や満足度の高い授業を目指す。 ・関西研修、じげ産業文化探訪等の活動内容が学習意欲をさらに高めるよう、その地域で見られない見学先を精選し多面的な指導を行う。 ・生徒が中心となって生徒会活動を運営し、生徒の連携が強まる指導を行う。 ・学校から積極的な情報提供を行うと同時に、保護者が相談しやすい体制を整え、学校と家庭の信頼関係の構築に努める。	・新入生に対して授業規律を維持して落ち着いた雰囲気の中で授業に取り組む支援を重ね、授業規律は概ね良好だった。進路についてじっくりと考え進路決定を行い、3年次生は進路目標に向けて努力している。 ・2年次生の関西研修において、夜間中学校生との交流で学ぶことの意義について考えとともに、企業見学等を通して生徒の進路意識が高まった。 ・生徒会執行部が中心となって対面式、生徒総会、七夕まつりなどの行事を運営し、生徒間の親睦が深まった。 ・6月の家庭訪問をはじめとして、学校と家庭とでこまめに連絡・連携をとるとともに、スクールカウンセラー、スクールソーシャルワーカー、キャリアアドバイザー、外部機関等と連携をとり、保護者要望・相談に対する効果的な生徒指導・生徒支援を行うことができた。	B	・11月に実施予定の進路講演会を通して、さらなる視野の広がりや高い進路目標にチャレンジする意欲の向上を図る。 ・3年次生全員の進路志望の達成に向けた学習指導、面接指導等を実施する。

【全日・定時制課程共通】

評価項目	具体的項目	年度当初			中間評価結果(10)月		
		現状	目標(年度末の目指す姿)	目標達成のための方策	経過・達成状況	評価	次年度に向けての改善方策
業務改善の取り組み	・学校行事・研修会等の見直し ・長時間勤務者の解消	・目的が重複する行事やその準備等によって、勤務時間の長大化につながっている。 ・各部で休養日の設定などがなされていない。 ・完全下校時間の徹底がなされていない。	・優先順位の低いものについて1つ以上の業務削減。 ・月当たりの時間外業務を平成29年度比で15%削減。 ・休養日、活動時間を設定した活動方針の全部活動への徹底。 ・部活動に係る時間外業務80時間以上勤務者の削減。	・行事や校務分掌を一覧化、優先順に洗い出し。 ・行事の準備等に過剰なものがないかの点検。 ・管理職員による各部の休養日、活動時間の把握、遵守の働きかけ。	・全日制は、部活動の休業日、活動時間を設定した活動方針の全部活動への徹底を働きかけている。 ・定時制は、学校行事や校務分掌のバランスは保っている。 ・月当たりの時間外業務は8月末時点で平成29年度比で23%削減。	B	・全日制は目標達成のための方策を継続する。 ・定時制の学校行事について、さらに生徒同士の連携の強化、進路意識の向上に効果的な行事内容、効率のよい校務分掌のバランスを検討する。